

モダニズムが夢見たユートピア： ドイツ田園都市建設の歴史(2) — 労働者コロニーの建設 —

副 島 美由紀

1. 「モダンのハーフタイム」

ドイツの美術史家、ユルゲン・クラウゼは、1904年から第一次世界大戦勃発までの10年間に対し、近代化の道半ばという意味で「モダンのハーフタイム」という呼称を与えている。¹⁾1920年代に開花する大衆文化の醸成期であったこの時代は、反近代思想と様々な技術的刷新が混在する複雑な様相を呈していたが、モダニズムは未だ大衆のものではなく、専ら各分野における前衛のものであった。例えば建築の分野では、ペーター・ベーレンス (Peter Behrens, 1868—1940) やブルーノ・タウト (Bruno Taut, 1880—1938) といった前衛が、労働者住宅建設に象徴されるように「芸術と民衆の一体化」²⁾を目指していた。1908年に始まるドイツの田園都市建設はそのような「モダンのハーフタイム」に起きた典型的な出来事だと言えよう。

ドイツで最初に田園都市の建設に着手したのは、ドレスデンの家具工場主カール・シュミット (Karl Schmidt, 1873—1948) であった。1907年「ドイツ工作連盟 (Deutscher Werkbund)」の設立に参加したシュミットは、「ドイツ田園都市協会」のメンバーでもあったヘルマン・ムテーズィウス (Her-

¹⁾ Klaus-Jürgen Sembach, Jürgen Krause, Ulrich Schulze u.a., Neunzehnhundert-zehn, Halbzeit der Moderne: Van de Velde, Behrens, Hoffmann und die anderen. Stuttgart, 1992.

²⁾ ブルーノ・タウトの「建築綱領」(1918)より。In: Uwe Schneede (hrsg.), Die zwanziger Jahre. Köln, 1979, S. 72.

mann Muthesius, 1861—1927) やリヒャルト・リーマーシュミット (Richard Riemerschmid, 1868—1957) 等の建築家達と繋がりを持つようになる。開明的な企業家シュミットにとって田園都市建設とは、労働者の生活改善と時代の動向への貢献という自らに課した二つの任務を同時に果たす可能性を意味していた。翌年彼は住宅建設有限会社を設立し、ドレスデン郊外に140ヘクタールの土地を購入する。³⁾ 家具工場「ドイツ・クラフト工房」を中心企業とする「田園都市ヘレラウ」の誕生である。

ヘレラウの建設には二つの手本があった。イギリスの田園都市レッチワースと、ドイツの労働者コロニーである。芸術家コロニーという側面も持っていたヘレラウだが、やはり田園都市の中心的要件は労働者への良質の住宅提供であり、私企業の経営による労働者コロニーはシュミットおよびヘレラウの建築家達にとって前例としての大きな意味を持っていた。本論はドイツ田園都市建設の歴史を回顧する作業の一環として、ドイツにおける労働者コロニー建設という現象を振り返り、その歴史的意義及び田園都市運動その他の生活改革運動との連関を概観する試みである。

2. 労働者住宅の“発見”

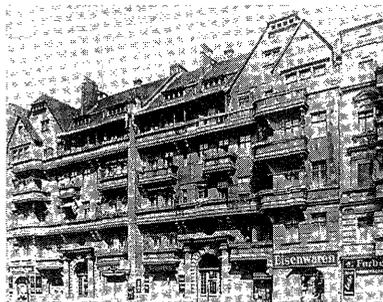
19世紀後半のドイツにおける大都市の住宅問題については、本稿の前編「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(1)」⁴⁾において既に述べたが、住宅問題が社会問題として顕在化するまで賃貸アパート等の低所得者用住宅建設は建築家ではなく左官屋の仕事と考えられていた。1841年、ベルリンで労働者住宅のためのコンペが行われた時、建築家同盟は「そのような課題は建築学的魅力に欠ける」という理由で参加を拒否している。

³⁾ Hans Jürgen Sarfert, *Hellerau, die Gartenstadt und Künstlerkolonie*. Dresden, 1992, S. 15f.

⁴⁾ 副島美由紀「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(1)——世紀転換期の生活改革運動」, 小樽商科大学「人文研究」第96輯, 1998, p. 189 ff. (1998)

住宅問題が深刻化してきた1891年ですら、多くの建築家が労働者住宅建築は芸術的に魅力のない仕事と考えていた。⁵⁾ 彼らの意識に変化をもたらしたのは、1870年頃から始まった住宅改革や土地改革等の生活改革運動である。「社会政策協会 (Verein für Socialpolitik)」、「ドイツ公共衛生促進協会 (Deutscher Verein für öffentliche Gesundheitspflege)」、「住宅改善協会 (Verein für Wohnungsreform)」といった団体や、1889年の帝国協同組合法成立を受けて設立された建築協同組合の活動により、建築家達の目は次第に低所得者の住宅建築に向かうようになる。しかも「大衆のための芸術」を目指した芸術運動等の影響により、内的機能に即した芸術性の探求がそのような住宅建築にも求められるようになっていった。

「賃貸兵舎 (Mietskaserne)」と呼ばれた高層賃貸アパートの改善に最初に取り組んだのは、プロイセン政府の建築マイスターでフリードリヒ・シンケル賞の受賞者でもあるアルフレート・メッセル (Alfred Messel, 1853-1909) である。彼は1892年、著名な土地改革論者アドルフ・ダマシュケらが組織す



アルフレート・メッセルによるベルリン建築・住居共同組合のアパート (1893)

⁵⁾ Fritz Neumeyer, *Bauträger und Baustil: Baugenossenschaften und Werkwohnungsbau in Berlin um 1900*, in: Ekkehard Mai (hrsg.), *Kunstpolitik und Kunstförderung im Kaiserreich*. Berlin, 1982, S. 309.

る「ベルリン建築・住居共同組合 (Berliner Bau-und Wohnungsgenossenschaft)」の依頼により賃貸アパートを建設する。それは低所得者の共生という目的を建築的に反映した初めての総合的デザインとして注目を浴びた。

この「ベルリン建築・住居共同組合」に属していた住宅改革者のハインリヒ・アルブレヒト (Heinrich Albrecht) は、1892年ベルリンで初めての「労働者住宅設計図展示会」を開催し、建築家達に労働者住宅建築への参画を促す。また1896年に小冊子『労働者住宅 (Das Arbeiter-Wohnhaus)』を出版し、メッセルのデザインを載せて住宅改革に関する理論的基盤の確立に貢献した。自ら労働者コロニーやゾイドルングの建設に携わったブルーノ・タウトはメッセルの影響を認め、自らの仕事を「メッセルの理念の継承」であるとさえ語っている。⁶⁾

新時代の工場建築で知られるペーター・ペーレンスも、中産階級の住宅を



『労働者住宅』に載ったメッセルによる労働者住宅のデザイン (1896)



ペーター・ペーレンスによる AEG の社宅 (1911)

⁶⁾ *ibid.*, S. 311.

模倣した労働者住宅を批判し、労働者住宅に合目的性と真の芸術性を与える必要性を説いた。メッセル同様、協同組合が体现しているような「共生の精神を構造的にも表現できるような建築」⁷⁾を目指したペーレンスは、1911年 AEG（一般電気株式会社）のための社宅を建設する。このようなペーレンスの理念は彼の事務所にはいたヴァルター・グローピウスとミース・ファン・デル・ローエに引き継がれる。かつてブルジョワジーが「労働者」を発見したように「労働者住宅」を発見した若き建築家達は、そこに擬古典主義的建築との訣別の可能性を見ていた。ムテーズィウスは1906年、次のように語っている。「現在のドイツにおける市民的な建築美術を特徴づけるものは、近い将来手に入るはずの健康への願いである。その展望は明るい。個々の分野ではすでに春の到来を告げる徴が見られる。特に労働者住宅建築の分野がそうである。」⁸⁾ こうして1900年頃から建築美術の前景に躍り出た労働者住宅は、まさに「モダンのハーフタイム」の期間を通し、市民的幸福の物理的な器としてモダニズムの普及に大きな役割を果たしてゆくのである。

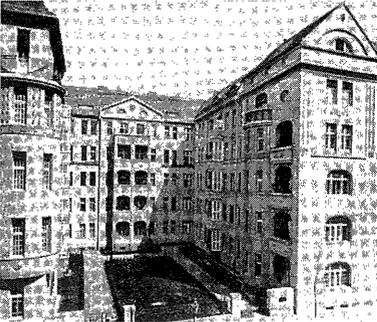
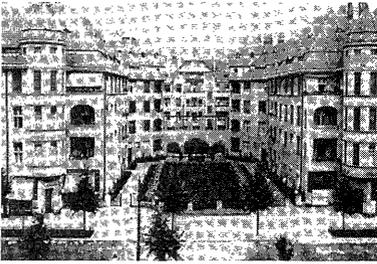
3. ベルリンの労働者住宅

住宅改革に対する理念が労働者住宅や建築組合住宅などの分野で生かされるようになったとは言え、都市における上質で廉価な住宅建設は容易ではなかった。特にイギリス、オランダ、北西ドイツ等の水平家屋文化圏と較べ、中部ドイツから東欧にかけての垂直家屋文化圏⁹⁾では、理想とされたイギリス式一戸建て住宅の実現はより困難であった。とりわけベルリンでは家屋一棟当たりの居住者数が高く、当時建設された建築組合住宅の例にも見られる

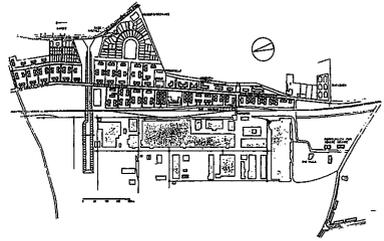
⁷⁾ *ibid.*, S. 313.

⁸⁾ Axel Schollmeier, *Gartenstädte in Deutschland*. Münster, 1988, S. 49.

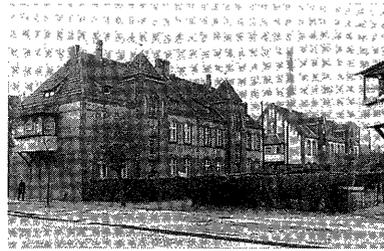
⁹⁾ Josef Stübgen 著 “Der Stätdebau” (Darmstadt, 1890) によると、ヨーロッパには北フランス、オランダ、北西ドイツからイギリスへと広がる水平家屋文化圏と、南欧諸国、フランス中南部、中部ドイツから東欧にかけての垂直家屋文化圏が存在するという。In: Brian Ladd, *Urban Planning and Civic Order in Germany, 1860-1914*. London, 1990, S. 150.



ベルリンの建築組合住宅, 上(1907)・
下(1911)



労働者コロニー・ヴィルダウの見取り
図。体育館やプールがある。(1900)



労働者コロニー・ヴィルダウの住宅

ように、高層アパート建築からの脱却はほぼ不可能であった。ベルリン近郊で広い敷地を持つ労働者コロニーの建設が始まったのは、好景気と生産工程の刷新、鉄道や船舶等の交通手段の発達等により産業の郊外移転が起こった1895年頃のことである。

1895年、アルバート・ボルズィヒの機械工場がモアビート街からテーゲルに移転し、同時に400戸の労働者住宅が建設される。また、1900年には機関車と魚雷を製造する「ベルリン機械製作株式会社」がベルリンから25キロの郊外に労働者コロニー・ヴィルダウを造っている。これらの住宅は工場との近接性において労働者にとって有利であったのみならず、当時の個人経営のアパートより広くて衛生的で、家賃も普通より20～50パーセント低かった。また当時のプロイセンの法律が郊外の住宅地開発に公共施設の建設を義務付けたことから、ヴィルダウのコロニーにも学校、商店、スポーツ施設等が備

家屋一棟当たりの平均居住者数 (1910)

ドイツの都市		その他の都市	
ブレーメン	7.8	マンチェスター	4.9
フランクフルト	17.1	ロンドン	7.9
エッセン	17.6	リエージュ	6.7
ケルン	18.1	アントワープ	8.1
シュトゥットガルト	18.6	ハーグ	6.5
デュッセルドルフ	19.1	アムステルダム	13.4
ハノーファー	20.0	フィラデルフィア	5.4
ライプツィヒ	27.4	シカゴ	8.8
ドレスデン	34.6	パリ	38.0
ミュンヘン	36.6	ブラハ	40.9
ハンブルク	38.7	ブダペスト	41.3
ポーゼン	51.8	ウィーン	50.7
プレスラウ	52.0		
ベルリン	75.9		

Rudolf Eberstadt, Handbuch des Wohnungswesen und der Wohnungsfrage.(Jena, 1920)より

わっていた。労働者コロニー建設の目的は安定した労働力を確保することと労働者の生活に物質的・精神的安定をもたらすことであった。しかし労働契約の締結を条件とする住宅への居住が工場への依存度を高める上、企業指導型の福祉が労働者管理機関となってしまう危険性もあった。それまで大都市生活者だったベルリンの労働者達は大家族的なコロニー運営に抵抗を感じ、また社民党、労働組合、社会政策協会などは経営者指導型の福祉政策に懐疑的だった。1902年、ボルズィヒ社の住宅のうち社員が居住していたのは約半数に過ぎなかったという。¹⁰⁾

工場の郊外移転に付随して生じ、労働者の福利厚生には大きく貢献した労働者コロニーだったが、ベルリンの労働者意識を鑑みたハインリヒ・アルブレヒトは、コロニー建設は労働者が大都市からではなく地方から召集される

¹⁰⁾ Neumeyer, *ibid.*, S. 318.

場合に適しているとして、ベルリンの企業家にはむしろ建設協同組合の活動支援を勧める。¹¹⁾ 実際ベルリンでは「ズィーメンス・シュタット」のように建設協同組合と企業家との共同事業という形が取られるようになり、労働者コロニーはむしろベルリン以外の中・小都市で成功に至っている。

4. イギリスの前例

緑に恵まれた独立性の高い立地に労働者のための生活共同体を造るというコロニー建設の理念は、産業革命の先進国であるイギリスの例を模範としていた。イギリスではロバート・オーウェンに代表される19世紀前半の社会主義的ユートピア建設の他に、モデル・ヴィレッジと呼ばれる労働者団地が羊毛工業地帯を中心に誕生していた。ソルテア、コプレイ、アクロイドン等の丘陵地帯にできた初期の労働者コロニーである。これらのモデル・ヴィレッジは背中合わせ式住宅が中心で、独立式住宅という理想の実現には遠かったものの、労働者住宅への新しい様式の導入としては意欲的な試みであった。

オーウェン主義が廃れた後の19世紀末からは、博愛主義的工場主と呼ばれる企業経営者達が労働者の住環境改善による社会改革を継承する。チョコレート工場主ジョージ・キャドバリー (George Cadbury) が1887年パーミンガム郊外に建設したボーンヴィル (Bournville) と、石鹼工場主ウィリア



モデル・ヴィレッジのデザイン (1888)

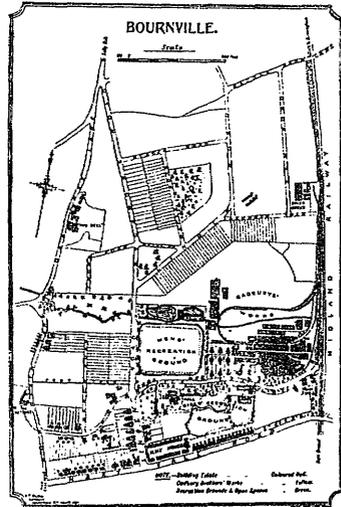


ソルテアの労働者住宅 (1851)

¹¹⁾ ベルリン機械製作株式会社は1906年に、ボルズィヒ社は1919年に建設協同組合を設立して事業を継続している。



コブレイ、前庭のある背中合わせ式住宅(1853)



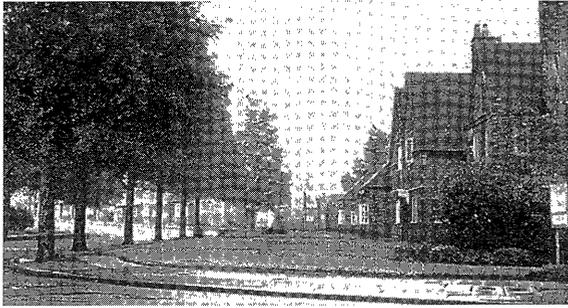
ボーンヴィルの見取り図(1898)
集会場、養老院、運動場、公園等
が見える。



ボーンヴィルの2世帯住宅(1900),
1981年

ム・ヘスケス・リヴァー(W.H. Lever)がリヴァプールの対岸に建設した1889年のポート・サンライト (Port Sunlight) は、模範的なガーデン・ヴィレッジとしてドイツの労働者コロニー建設に大きな影響を与えた。ガーデン・ヴィレッジとは、工業の成熟に伴い工場が都市の過密地区から分散したことにより誕生した都市郊外の労働者コロニーである。

労働力の安定供給がモデル・ヴィレッジ及びガーデン・ヴィレッジ建設の第一の目的ではあったが、特にガーデン・ヴィレッジの場合、「労働者の社会的状態を改善する」という理想主義的な理念が極めて強く前景化していたこともまた明らかである。この時期の工場経営者達は、労働者の住環境が彼らの芸術観と世界観に与える影響を明確に意識していた。「世紀の変わり目の一

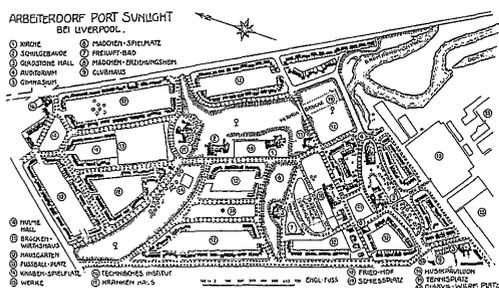


ポート・サンライトの街路（上）と2世帯住宅
（下）（1900），1981年

つの事件」¹²⁾と言われたボーンヴィルを建設したキャドバリーは、「人間を取り巻く状況を改善するための近道は、その理想像を高めることである。しかしその住居がスラムのようで、唯一の娯楽が酒場通いである時、どうして人は理想像を高められようか」¹³⁾という言葉を残している。また、ポート・サンライトの経営者リヴァーも、「健康のために最適な環境の確保を目的に、適切

¹²⁾ 月尾嘉男・北原理雄『実現されたユートピア』鹿島出版会，1980。p.163.

¹³⁾ Gabriele Howaldt, Die Arbeitersiedlung Gmindersdorf in Reutlingen, in: Ekkehart Mai (Hrsg.), *ibid.*, S. 334.



ポート・サンライトの見取り図
(1911)
プール、サッカー場、児童公園、
音楽堂等がある。

な住宅条件のもとで都市生活を営むことこそが、人類の幸福にとってとりわけ重要である」と語っている。¹⁴⁾

ボーンヴィルもポート・サンライトも、広い敷地に庭付き住宅と商店、教会、病院、学校といった公共施設を持つ恵まれた労働者コロニーとなった。住宅建築の伝統を生かしながら「20世紀の要求に答える」という近代主義的発想のもとに建てられたこれらの住宅を、ムテーズィウスは「真に実用的で、理性的で、健康である」¹⁵⁾と評している。これらは一棟の世帯数から言えば2世帯から6世帯住宅で、庭付き一戸建て住宅という理想の実現には至らなかったものの、採光や換気等の衛生面に配慮した点において当時としては格段に水準の高いものだった。特にポート・サンライトは、「イギリス人の内側に根付いた一つのユートピア像が、現実の環境として近似値を実現していた」¹⁶⁾と言われている。

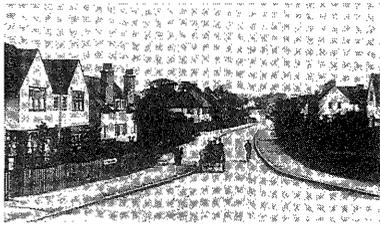
勿論これら博愛主義的共同体の中にも管理的な体質が存在したことは否めない。ある工業技師はレヴァーに対し、「独立心の旺盛な者は誰でもポート・サンライトの空気を長く吸っていることはできません」と書き送っている。¹⁷⁾

¹⁴⁾ 月尾嘉男・北原理雄，同上，p. 163.

¹⁵⁾ Schollmeier, *ibid.*, S. 49.

¹⁶⁾ 月尾嘉男・北原理雄，同上，p. 169.

¹⁷⁾ 同上，p. 169.



田園都市・レッチワース

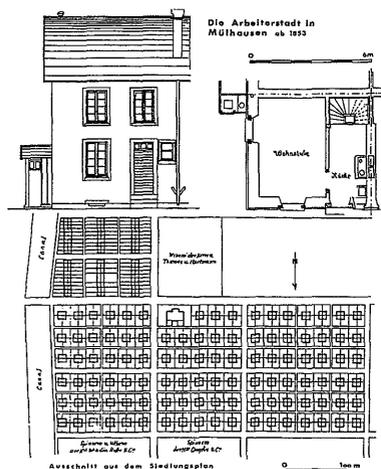
しかし“繁栄の共有”を富の蓄積に匹敵する課題と考え、また労働者階級の住環境にも美的な性格を付与する必要があるという工場経営者達の信念は、これら労働者コロニーの建設にとって非常に重要な意味を持っていた。ドイツの労働者コロニーに及んだその影響も、建築様式に関するよりもむしろ思想的な面において大きかったと言えるだろう。その後キャドバリーがボーンヴィルを「ボーンヴィル・ヴィレッジ・トラスト」という形で住民の共同経営に任せ、リヴァーは1909年、リヴァプール大学の建築学部にも都市デザイン学科を設置するための寄付を行うなど、彼等の信念はさらなる社会改革のプログラムへと発展してゆく。また、1902年にエベネザー・ハワードの田園都市レッチワースの建設が始まった時、共同出資者となったのもキャドバリーとリヴァーの二人だった。

5. ドイツの代表的労働者コロニー

5-1. ミュールハウゼン

ドイツの労働者住宅に最初の影響を与えたのは、当時フランス領だったアルザスのミュールハウゼンに建てられた紡績工場住宅〈シテ・ウヴリエール *cité ouvrière*〉である。1853年に建設されたこの集落のモデルは、1851年ロンドンの万国博に展示された労働者住宅であり、モデル・ヴィレッジの一つであるソルテアとの類似点も顕著だと言われている。¹⁸⁾ミュールハウゼンも

¹⁸⁾ Schollmeier, *ibid.*, S. 45.



ミュールハウゼン，4世帯住宅団地の見取り図（1853）

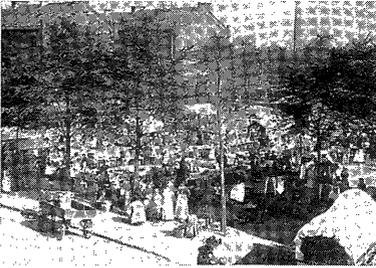
最初背中合わせ式住宅を建設していたが、後に後期のモデル・ヴィレッジに倣って4世帯住宅を採用している。この4世帯住宅は衛生面でまだ問題を残してはいたものの、背中合わせ式住宅より進化したものとして当時は肯定的に評価された。またミュールハウゼンにおいて長期ローンの支払いによる住宅購入の道が開かれたことは、独立住宅の所有へ至る試みと見ることができよう。この4世帯住宅の様式が、1890年頃から急増したルール地方の労働者住宅のモデルとなった。

5-2. クルップ・コロニー

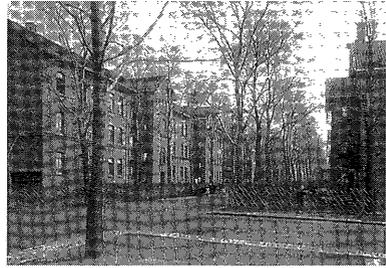
ドイツで最も有名な労働者コロニーと言えば、軍需産業で知られるクルップ商会のクルップ・コロニーである。それはまた既に1860年代の後半に建設が始められたドイツで最も歴史の古いものでもある。クルップ社の住宅及びその他の厚生施設の建設は、労働者とその家族を包摂する「クルップ帝国」の隆盛にとって非常に重要な事業であった。

クルップ社の福利事業は1850年代に始まった。自らも勤勉な工場勤労者であったという「大砲王」アルフレート・クルップ(Alfred Krupp, 1812-1887)は、国内立法に先立つこと約30年の1853年に社内労災保険や年金制度を施行している。そして鉄鋼産業の隆盛に伴って従業員が急増した60年代後半からは、労働者住宅が企業の繁栄のために必要不可欠な厚生設備となっていった。

“クルップの町” エッセンの人口は1850年には約9,000であったが、職を求める移住者の流入を受けて1871年には52,000へと急増した。クルップ社



シェーダーホーフの広場 (1900)



クローネンベルク (1906)

の従業員数も 1864 年の 6,900 から 1871 年には 10,400 に増加し、住宅不足に対する労働者の不満が労働運動の高まりに拍車を駆けていた。1865 年、まず独身労働者、高齢者、退職者のために 200 世帯用の住宅が建設される。それは木造バラックのような簡単な建物だったが、その後半世紀に亘って行われるクルップ・コロニー建設の始まりであった。

1870 年代に入り、普仏戦争後の 4 年間で従業員数が 12,000 に達する頃、ヴェストエントホーフ、ノルトホーフ、シェーダーホーフ、クローネンベルクといった住宅地が相次いで建設され、社宅は順次快適さを増していった。特に後者 2 つの団地は、緑の多い中央公園と各住棟に設置された庭によって恵まれた住環境を持ち、コロニーとしての計画的な全体像が実現されていた。「緑の前庭と豊かな並木に縁取られた街路はそれまでのドイツのいかなる労働者街にも見られぬものだった」¹⁹⁾とされている。

クルップ・コロニーには、教会、学校、病院、商店等の施設も揃っており、それらの厚生施設はクルップ社の先駆的な企業精神を反映していた。しかしアルフレート・クルップによる住宅建設は、あくまでも最低限の住宅を労働者と企業の両者にとって最も低廉な価格で提供するための企てであり、居住者の美的な欲求を満足させるためのものではない。労働者住宅に芸術性を付与するためには、世代の交代を待たなければならなかった。

¹⁹⁾ 月尾嘉男・北原理雄，同上，p. 190.

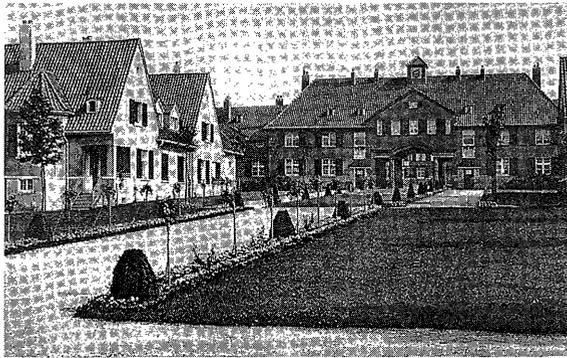
1887年に当主となったフリードリヒ・アルフレート・クルップ (Friedrich Alfred Krupp, 1854—1902) は、新時代の空気を呼吸していた。イギリスのガーデン・ヴィレッジによる影響を受けた彼は、安価で簡素なだけでなく美的で芸術性の高い住環境作りを目指した。そして「老人には住み心地を、若者には美を」²⁰⁾というモットーのもと、視覚的効果を意識した広い住宅を建設し、スポーツや芸術鑑賞のための施設、図書館等を充実させた。1893年から1907年にかけて、アルフレッツホーフ、フレデリクスホーフ、フリードリヒスホーフ等、アパート形式を脱して半独立式住宅又は4世帯住宅を中心とするコロニーが完成する。それぞれ放射状の街路、並木と家々の庭など、田園的雰囲気を持つ落ち着いた住宅地だった。この時代のコロニーの中で、絵画的効果への志向がひととき顕著なのがアルテンホーフである。主に退職者、傷病者、寡婦のためのこのコロニーは、「恩給を受けながら自宅で老後を過ごす機会を退職者に提供する」²¹⁾という父親の遺志をフリードリヒ・アルフレートが独自の価値観で実現させたものだった。彼は建設に先立ち、「(退職者に) 美しい健康な敷地でこじんまりした庭付きの小さな我が家を作ってやり、一生自分の好きなように利用して楽しい生活の一日を送らせた」²²⁾と語っている。アルテンホーフは500の住戸に2つの礼拝堂、森と公園を持ち、直線街路は一本もなく、ロマン主義的な審美観によって作られていた。フリードリヒ・アルフレート自身よくここに立ち寄り、時を過ごしたという。

1890年代のクルップ社は、労働者の生活に娯楽の喜びと芸術的な潤いを与えることが上質な労働力の円滑な再生産にとって重要であるという認識に立っていた。フリードリヒ・アルフレートの時代までに完成した住宅は28,000を数え、第一次大戦前に8万の人間を抱えた「クルップ帝国」は、その労働者達が「クルップの住宅に住み、クルップ社の赤ん坊はクルップの医

²⁰⁾ 月尾嘉男・北原理雄，同上，p. 191。

²¹⁾ 諸田實『クルップ』東洋経済新報社，1980，p. 200。

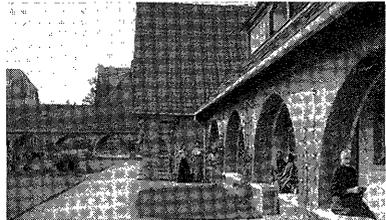
²²⁾ Wilhelm Berdrow, Alfred Krupp und sein Geschlecht. Berlin, 1937, S. 212.



アルフレッツホーフ (1894)



アルテンホーフ (1906)

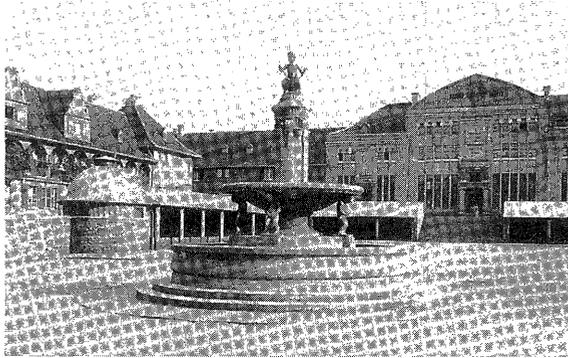


アルテンホーフの寡婦用住棟 (1920)

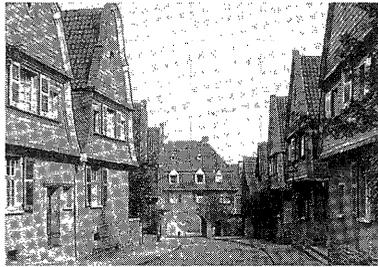
者によって取り上げられ、クルップ社員の子供達はクルップの図書館から本を借り、クルップの教会で結婚式を挙げ、クルップの墓地に葬られた²³⁾と言われるほどの大家族的共同体となる。

さらにフリードリヒ・アルフレートの死後、クルップ・コロニーの頂点をなす住宅地が建設される。夫の死後も福祉事業に力を入れた妻のマルガレーテが資金と所有地を提供してエッセン市と協力し、クルップ社の社員及びエッセン市民のために建設したマルガレーテンヘーエである。エッセン市の中心から4キロの、周囲を森で囲まれた敷地に準備された約2,500戸の住宅

²³⁾ 月尾嘉男・北原理雄，同上，p. 193.



マルガレーテンヘーエの広場（1909）



マルガレーテンヘーエの住宅（1909）

地はクルップ・コロニーの中で最もビクチャレスクな効果を持ち、伝統的な建築美を意識して作られていた。破風や張り出し窓の付いたその様式はドイツの典型的な村落のイメージを投影したものだだったが、擬中世的・ロマン主義的で、真に労働者向けのデザインとは言い難かった。クルップ・コロニーの建設が労働者の生活環境改善に大きく寄与しながらも、建築的に見れば労働者住宅として真の需要に叶った機能性と美を求めるといったコンセプトからはずれていると言われるのは、²⁴⁾ 伝統的な中産階級の理想像に向かうその審美的傾向に因っている。しかし社員の福利厚生面のみならず熟練工の長期的

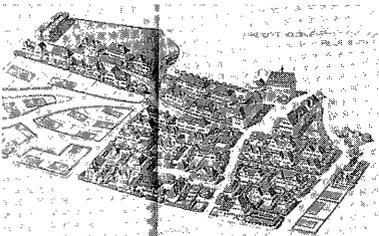
²⁴⁾ Howaldt, *ibid.*, S. 352.

確保と製鋼法の秘密の保持という点においても、クルップ・コロニーの企業経営的な成功は大きかったと言えよう。

5-3. グミンダースドルフ

ドイツの伝統的な住宅様式を踏襲しながらもより機能主義的で、労働者のアイデンティティ育成という目的に沿ったと言われているのが、ヴェルテンベルク州ロイトリンゲンの繊維工場ウルリヒ・グミンダー社によるグミンダースドルフ (Gmindersdorf) である。

19世紀後半以来、労働者の確保とその住宅問題の解決は企業にとって共通の課題であったが、ウルリヒ・グミンダー社の当主達は地方名士としての自負からもキリスト教的な社会政策理念に関心を持っていた。イギリス滞在の経験から労働者の住宅環境についての理念を持つに至ったエミール・グミンダー (Emil Gminder) は、「帝国自由都市ロイトリンゲンは労働者のために劣悪でかつ高価な住宅しか提供してこなかった」²⁵⁾としてクルップ社の例を引き、ロイトリンゲン市と労働者コロニー建設の交渉を始める。グミンダーの理想によると、廉価で美的で健康な住宅地はコロニーでもゾーンドルングでもなく、独立した村 (Dorf) となるべきであった。1903年、シュトゥットガルトの工科大学で都市計画を教えていたテオドール・フィッシャー



グミンダースドルフの見取り図
(1908)

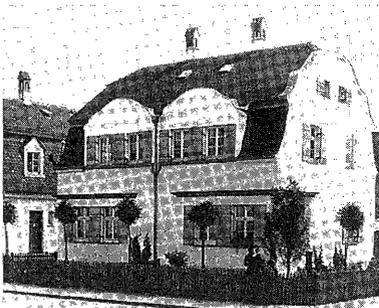


グミンダースドルフの2世帯住宅
(1903), 1973年

²⁵⁾ *ibid.*, S. 332.

(Theodor Fischer, 1862—1938)が建築デザインを担当し、48の家屋と商店、託児所、小学校、養老院等から成る一つの小規模な村の建設が始まる。

「モダンのハーフタイム」は、実用派が次第に芸術派の優位に立っていく時代でもあった。1904年、芸術批評家グルリットは都市建築に関し、「目的に適ったものこそが真に芸術的かつ美的であり、真に美的なものこそが目的に適っている」²⁶⁾というモットーを発表している。フィッシャー自身も「建築家は衛生学者や社会政策者の示す可能性を、最も廉価に、実用的に、また慎ましい条件下でも美しく実現させる術を心得ていなければならない」²⁷⁾と考えていた。グミンダースドルフもイギリスのガーデン・ヴィレッジを模範としており、住戸は大きくても4世帯住宅のコテージ様式だった。質素で美しい建築を心がけたフィッシャーは、木組み、切り妻屋根、差し掛け屋根といったドイツの伝統的な建築様式と都市型スタイルを折衷し、画一性を避けるため18ものモデルを作る。伝統的なスタイルへの回帰は「フォルムと機能、美と目的、実用と芸術の調和」という彼の理念と相容れないものではなかった。グミンダースドルフの住民の多くは農村出身者であったし、労働者住宅が中



グミンダースドルフの2世帯住宅
(1905)



グミンダースドルフの住宅 (1907)

²⁶⁾ Schollmeier, *ibid.*, S. 51.

²⁷⁾ Howaldt, *ibid.*, S. 341.

産階級のための建築の亜流となることを避けるためにも、農村的建築様式が住民の現実に合致したものだ。また各ブロック内のレイアウトは住民の交流を容易にするよう考案されていた。

クルップ・コロニーとグミンダースドルフは両者ともイギリスの労働者住宅を模範とし、労働者に実用的で健康的な住宅を供給しつつ職場以外での生活の満足感を与えるという目標においても共通している。外見的にもマルグレーテンヘーエとグミンダースドルフの差はさほど大きくはない。しかし建築を世界観の表出と捉えていたフィッシャーにとって、コロニー建設は労働者の生活の安定と労働力の再生産を図るという目的の枠を越え、「互いに心情を共有する住民組織」創設²⁸⁾の試みだった。グミンダースドルフは企業全体の労働者に占めるコロニー住人の割合の低さと、労働者の再生産にさほど成功しなかったという点において、クルップ・コロニーと比較するとその経済性は低かった。しかし人間の新たな共生理念の体現を目指したものとして、「人間生活の新たな理想の追求」により進歩的に踏み込んだ試みであったと言われている。²⁹⁾

社会改革者のヘルマン・シュミットは1910年、「毎年多くの建築家や社会政策者がイギリスへ赴いて模範的なコロニーを見学し、賞賛するが、規模という点を除いてはイギリスの例に決して引けを取らない労働者コロニーがドイツにも既に存在するのである。第一に挙げるべきは、ヴェルテンベルク州の我らが小さきグミンダースドルフである。」という言葉を残している。³⁰⁾

6. コロニーと生活改革運動

テオドール・フィッシャーは擬古典的建築から出発しながら1900年頃に新しい様式の模索を始めた建築家である。グミンダースドルフのプロジェクト

²⁸⁾ *ibid.*, S. 354.

²⁹⁾ *ibid.*, S. 353.

³⁰⁾ *ibid.*, S. 347f.

には彼の事務所にはいたブルーノ・タウトやシュトゥットガルト中央駅の設計者として知られるパウル・ボナーツが参加しており、フィッシャー同様「ドイツ工作連盟」の設立メンバーだったリヒャルト・リーマーシュミットも彼と共にヘレラウの建設に関わっている。フィッシャーはエーリヒ・メンデルスゾーンやフーゴ・ヘーリング、ヴァルター・グローピウスといった面々にも影響を与えたと言われ、建築史上の功績は大きい。そのフィッシャー自身とグミンダースドルフ建設は、生活改革運動と相互に影響を与え合う関係にあった。

1900年頃、社会改革者や社会主義者達により「家庭生活の理想」が語られ始めていた。「幸福な人間存在の基盤は自宅と庭にある」とする民俗学者、W. H. リール (Wilhelm Heinrich von Riehl) の著書『家庭 (Die Familie)』がこの頃教科書版として再版され、広い読者層を得る。³¹⁾ リールは既に19世紀後半から田園礼賛によって知られた作家であった。³²⁾ 「田園都市協会」と「ドイツ工作連盟」両方の設立に加わったムテーズィウスも1907年、「唯一の人間的な住まいは独立家屋であり、虚栄からの脱皮、率直な心情、正直さ、深みのある精神生活は、独立家屋との相関関係にある」と述べている。³³⁾ また郷土保護運動や芸術教育運動等多くの生活改革運動に関与した反ユグヤ主義的イデオログ、パウル・シュルツェナウムブルク (Paul Schulze-Naumburg)³⁴⁾ は、1903年に理想的な集落の建築について述べた『村落とコロニー (Dörfer und Kolonien)』を著している。³⁵⁾ 1907年にはハウードの『明

³¹⁾ Wilhelm Heinrich von Riehl, *Die Familie*, 1855, erschien noch 1896, Stuttgart, in: Howaldt, *ibid.*, S. 354.

³²⁾ Schollmeier, *ibid.*, S. 27.

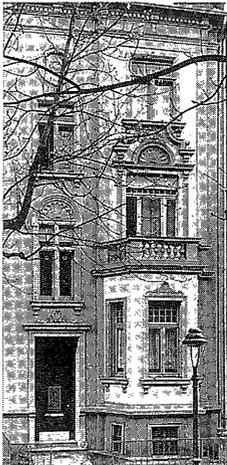
³³⁾ Howardt, *ibid.*, S. 354.

³⁴⁾ 副島美由紀「近代《病理》のイコノグラフィー：ナチスによる近代美術の〈病理化〉現象」, 小樽商科大学「人文研究」第91輯, 1996, p. 189 ff. 同「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(1)―世紀転換期の生活改革運動」, 小樽商科大学「人文研究」第96輯, 1998, p. 201.

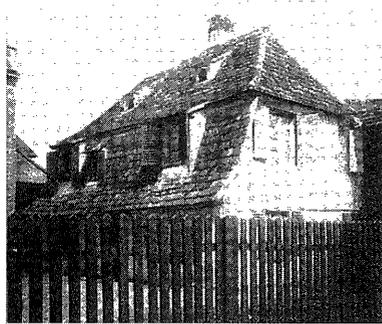
³⁵⁾ Paul Schulze-Naumburg, *Dörfer and Kolonien*, Kulturarbeiten Bd. III, Hrsg. Kunstwart, München, 1903.

『日の田園都市』がドイツで翻訳出版され、入植運動の高まりもあって共同体建設には大きな関心が寄せられていた。しかし19世紀ドイツの労働者住宅建築に対する不満は大きかった。ムテーズィウスは、イギリスのコロニー建築が「家庭的、小市民的、農村風の建築を経由して単純で自然で理性的な様式へ至る」ことに成功したのと較べ、「ドイツの歴史主義は、騎士時代の理想か大邸宅のイミテーション」に過ぎないと述べている。³⁶⁾ 真に実用的かつ理性的で、健康的な住宅様式が模索されねばならなかった。

フィッシャーはシュルツェ-ナウムブルクを通じてムテーズィウスがもたらしたイギリス建築に関する情報を得ていた。また『村落とコロニー』の中



中産階級のための住宅
(1899)



『村落とコロニー』に載った18世紀の住宅
(上)とフィッシャーのデザインによるグミン
ダースドルフの住宅(下)(1903)

³⁶⁾ Schollmeier, *ibid.*, S. 49.

でシュルツェ-ナウムブルクが「健康的農村建築」として賞賛した18世紀の様式を、彼はグミンダースドルフの住宅デザインに取り入れている。グミンダースドルフは伝統的であると同時に進歩的でもある「未来的伝統」創製の例として郷土芸術運動が称揚する対象となり、フィッシャーは郷土芸術運動の推進者と称されるに至る。またグミンダースドルフの様式は田園都市協会会長のキャンプマイアーにも賞賛され、20世紀の郷土芸術的建築モデルとして地方に広がっていった。³⁷⁾

一方労働者コロニー自体は、労働契約に左右される賃貸契約やその家父長的体質に対する批判を受け、企業経営という性格を変えつつあった。グミンダースドルフの5年後に建設が始まった「田園都市ヘレラウ」の場合、工場用地以外の土地を所有していたのは「有限会社ヘレラウ田園都市協会」と「ヘレラウ住宅建設組合」の二つの公益団体である。ヘレラウのプロジェクトに参加した建築家達は皆「ドイツ工作連盟」のメンバーであった。ヘルマン・ムテズィウス、リヒャルト・リーマーシュミット、ハインリヒ・テッセノウ、そしてテオドル・フィッシャーである。建築に「与えられた課題の内的な要求を究めること」を求めたムテズィウスや、労働者住宅の住民に期待される性質として「正直、冷静、明朗、誠実、質素、自尊心」等々を挙げていた³⁸⁾リーマーシュミットらの意気込みは高かった。1913年の「ダルクローズ学校」における祝祭劇開催を含め、ヘレラウの建設は「社会文化的な実験」³⁹⁾と見なされていた。

しかし第一次世界大戦の勃発が状況を大きく変える。田園都市ヘレラウは「ダルクローズ学校」の校長でスイス人のエミール・ジャック-ダルクローズが戦争を理由にスイスへ去った後、文化活動の支柱を失った。また第一次大戦中にできた「借家人保護法」により、労働者コロニーの居住は労働契約を

³⁷⁾ Howaldt, *ibid.*, S. 346; Schollmeier, *ibid.*, S. 27.

³⁸⁾ Howaldt, *ibid.*, S. 354.

³⁹⁾ Sarfert, *ibid.*, S. 22.

必要としなくなった。企業は公益住宅開発団体との共同事業に福祉事業の重点を移していく。戦争の勃発と共に「モダンのハーフタイム」も終わりを告げ、大戦終了後のドイツではさらに民主的な近代が始まるのである。

【その他の参考文献】

- ・ Walter L. Creese, *The search for environment: the garden city — before and after*. Yale University Press, 1966.
- ・ J.N. Tarn, *Working -class Housing in 19th-century Britan*. London, 1971.
- ・ Frank Bajohr, *Zwischen Krupp und Kommune*. Essen, 1988.
- ・ Michael Fasshauer, *Das Phänomen Hellerau: Die Geschichte der Gartenstadt*. Dresden, 1997.
- ・ 『独逸国クルップ會社ニテ千九百十二年ニ於イテ舉行シタル創立記念百年祭ノ祝祭史抜萃』
- ・ ウィルヘルム・ベルドロー著 『鉄鋼王クルップ』生活社, 1939.
- ・ 佐藤明 『クルップ兵器工場』六興商会出版部刊, 1942.

Eine Utopie der Moderne: Das Phänomen Gartenstadt in Deutschland (2) — Arbeiterkolonien in Deutschland —

Miyuki SOEJIMA

Das Jahrzehnt von 1904 bis 1914, also vom Ende des Jugendstils bis zum Ausbruch des Ersten Weltkriegs, wurde auf dem Gebiet der angewandten Gestaltung als eine Zeit zwischen Ereignissen gewertet. Für diese Periode der Gärung und des vielfachen Entstehens fand ein Kunsthistoriker, Jürgen Krause, eine Bezeichnung: »Halbzeit der Moderne«. Die Moderne vor 1914 war nämlich noch nicht die ganze Moderne, sie war eher noch das Privileg der Avantgarden.

Auf dem Gebiet von Architektur entdeckte die Avantgarde um diese Zeit die Arbeiterwohnung. Das war der Bereich, wo sich die jungen Architekten von »Historismus« und »Neoklassizismus« befreien und architektonische Experimente anstellen konnten. Leute wie Alfred Messel, Peter Behrens, Theodor Fischer und Bruno Taut bemühten sich um den Arbeiterwohnungsbau, und versuchten dabei einen der eigentlichen Funktion des Baues gerechten Kunststil zu finden.

Das Bevölkerungswachstum und die dadurch entstandene Wohnungsfrage der 1870-er Jahre brachten die Veränderung im Unternehmerdenken mit sich. Unterbringung und Beschaffung von Arbeitskräften wurden die Voraussetzung für die Produktion. So entstanden betriebliche Arbeiterkolonien in Deutschland fast ausschließlich zu dieser Zeit. Hinzu kam der Gedanke an eine Form der »Wohlstandsteilung« des Fabrikherrn durch eine solche Siedlungsanlage, was zwangsläufig einen hohen Anspruch auch an die ästhetische Gestaltung des Gemeinwesens stellte. Die

gestalterischen und qualitativen Verbesserungen waren vor allem bei den Krupp-Kolonien in Essen und Gmindersdorf bei Reutlingen deutlich. Diese Kolonien besaßen häufig Einrichtungen wie Schulen, Kirchen, Sport- und Konsumanstalten. Bei manchen Siedlungen war es sogar möglich, die Häuser durch eine langfristige Abzahlung zu erwerben. Dieser Wohnungsbau förderte also die gesellschaftliche Integration der Arbeiterbelegschaft durch materielle Sicherung.

Wegen der Koppelung von Arbeits- und Mietvertrag wurde Kritik an der Kontroll- und Disziplinierungsmöglichkeit des Betriebs geübt. Andererseits leisteten die Arbeiterwohnungen als Ort des alltäglichen Lebens dazu Beitrag, daß die Moderne in den 1920-er Jahren sämtliche Bereiche des Lebens aller gesellschaftlicher Schichten durchdrang.

Der erste deutsche Gartenstadtbau begann 1908 in Hellerau bei Dresden. Unter den Architekten, die alle Mitglieder des Deutschen Werkbundes waren, war auch Theodor Fischer, der architektonische Gestalter der Arbeiterkolonie Gmindersdorf. Für die Gartenstadtbewegung waren die deutschen Arbeiterkolonien eins der Vorbilder neben der englischen Gartenstadt. In der Gesamtkonzeption der Gartenstadtidee wollte man nicht nur die Arbeiterwohnungsfrage, sondern auch ein Problem der Stadtbevölkerungen mit einer umfassenden Lebensreform lösen.